

機関番号：27101

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20700498

研究課題名 (和文) 中途脊髄損傷者における運動・スポーツを通じた自己変容過程に関する研究

研究課題名 (英文) Self-transformation through Exercise and Sport: Individuals with Acquired Spinal Cord Injury.

研究代表者

内田 若希 (UCHIDA WAKAKI)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：30458111

研究成果の概要 (和文)：200 字

本研究の目的は、多面的階層モデルを用いて、運動・スポーツへの参加が及ぼす中途脊髄損傷者の自己知覚への影響を記述することであった。インタビューの内容分析から、運動・スポーツへの参加が、身体的自己および社会的自己のいくつかの側面に影響していることが示唆された。この回答から考察される意義のある側面として、身体的・社会的生活の両方において、運動・スポーツによって自己の意味が再定義されることが示された。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this research was to describe the impact of participation in exercise and sport on the self-perception of individuals with physical disabilities, using the multidimensional and hierarchical model. Content analyses of the interview responses indicated that participation in exercise and sport impacted some aspects of the physical and social self. The beneficial aspects, as discussed by the respondents, were that exercise and sport redefined their meaning of the self, both in their physical and social lives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：スポーツ科学

キーワード：障害者スポーツ，自己変容，脊髄損傷

## 1. 研究開始当初の背景

自己の基本構造およびその変容メカニズムを明確化するため、Fox & Corbin (1989) は自己概念に関する多面的階層モデルを提示した (図 1)。このモデルは、運動・スポーツに伴う身体的変化 (運動・スポーツ能力、

体力、体型、および筋力の向上) に伴い、これらに対する満足感や自己評価が影響を受け、ついで身体的側面全般に関する知覚が向上することで、最終的には自己概念の評価的側面である自尊感情もが向上することを示唆するものである。

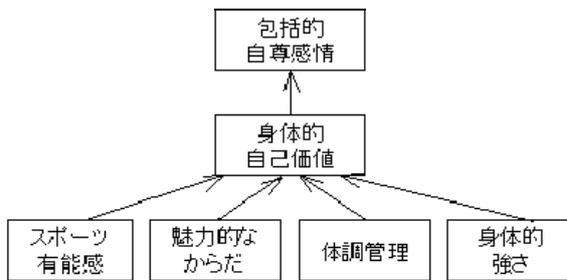


図1 自尊感情の多面的階層モデル (Fox & Corbin 1989)

近年、自己に関連する研究の枠組みとして多面的階層モデルの利用が推奨されている (Baldwin & Courneya, 1997). 申請者は、欧米を中心に検討されてきた多面的階層モデルを検討し、我が国の研究の発展に大きく寄与してきた。具体的には、(1) 多面的階層モデルを測定するための尺度を開発し、この尺度を用いて (2) モデルの日本人サンプルへの応用とその構造を共分散構造分析により解析した。また、(3) 男女での差異や (4) 関連要因の検討も行ってきた。

この応用研究として、中途脊髄損傷者における自己変容過程の支援を考えていくこととした。身体障害を負うと、(1) 身体的・社会的能力の否定的な自己知覚が生じる (Sherrill, 1997), (2) 身体的側面に関する自己評価が低下し、身体満足度や自己知覚に影響する (Lawrence, 1991), (3) 自己像が歪み、自己評価が低下する (石川・掘毛, 2001) といったように、身体的自己知覚が歪められることが報告されている。

この身体的自己知覚は自己概念の下位概念であり、自己の中心的要因であるため (Fox, 1998), 受傷によりこれまでの身体的自己知覚が歪むと、自己全体 (自己概念や自尊感情など) も揺らいでしまう。そのため、運動・スポーツを通じて障害受容が促されることで身体的自己知覚が再定義され、自己全体 (自己概念や自尊感情など) も変容する可能性がある。

これらのことを理解するために、Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルを応用し、運動・スポーツを通じた自己変容過程の仮説モデルを立てた (図2)。

## 2. 研究の目的

事故や病気のために身体機能や身体の一部を喪失し、ある日突然に身体障害者となることは、生活上の急激な変化や様々な喪失感、社会的存在の変化をもたらす経験である。

また、それまでの自己 (過去) が失われるだけでなく、今までと同じように続いていくと当たり前のように信じていた未来が同時に喪失される (やまだ, 2007)。

障害と共に生きる者が増加し、生き方への

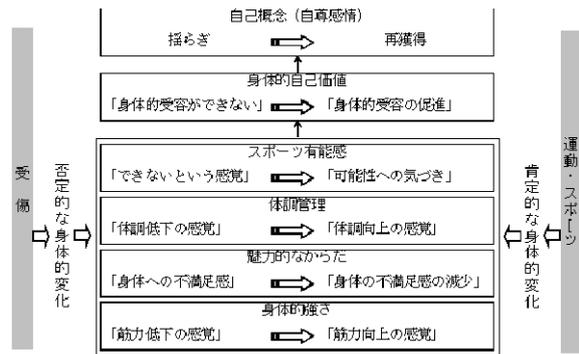


図2 多面的階層モデルを応用した本研究の仮説モデル

援助が問題となっている今日、中途身体障害者における自己変容過程の支援のあり方を検討することが求められている。

そこで本研究では、中途脊髄損傷者の受傷から現在までの自己変容過程に及ぼす運動・スポーツの影響を検証し、支援の一助となる運動・スポーツの役割を検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

質的アプローチを用いて研究を行い、対象者1名につき、1時間30分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューの内容は、本人の許可を得て IC レコーダで記録した。多面的階層モデルに準拠しつつ、受傷前から直後、競技開始前から現在に至る身体的変化と身体的自己知覚の変化、および自己概念に関する内容や生活の満足感の変化を中心にインタビューを進めた。

これに加えて、本研究では、自分にとっての仲間や重要な他者などとの社会的な関連における価値観についての知覚である社会的自己知覚 (Shavelson, et al., 1976) に関連する内容もインタビューに含めた。社会的自己知覚は、身体的自己知覚と同様に多面的な概念であり、自尊感情を評価的側面に有する自己概念の下位領域として位置づけられる。受傷に伴う社会的差別に伴う心理的ストレス (村井, 1995), 障害に起因する個人と社会環境との関係における問題、および不利益な社会的立場 (Brasile, 1990) といった社会的な問題は、自分にとっての仲間や重要な他者などとの社会的な関連における価値観についての知覚である社会的自己知覚を歪める。つまり、中途身体障害者は、受傷経験に伴い、否定的な身体的自己知覚だけでなく社会的自己知覚をもつようになるといえる。一方で、これまでに、ソーシャル・サポートが自尊感情の関連要因であること (内田・橋本, 2005) や、対人活動が自尊感情をその構成要素に有する心理的 QOL へより強く関連すること (原田ほか, 2001) が報告されている。

そこで、受傷から直後、競技開始前から現在に至るまでの社会的自己知覚の変化、具体的には「障害を負ったことで、対人関係や仕事など社会的側面に変化があったか」「競技を始めたことで、対人関係や仕事など社会的側面に変化があったか」といった内容についても、インタビューを行った。

データ分析においては、フリック (2002) およびウィリッグ (2003) を参考に、事例を対象とした質的内容分析を行った。質的内容分析は、原則として既存の理論モデルに則ってカテゴリーを生成する。本研究では、Fox and Corbin (1989) の多面的階層モデルに基づきながらまとめていくので、この手続きに従うこととした。

IC レコーダに録音されたインタビュー内容の逐語録を作成した。数度にわたる精読を重ね、発話を意味内容のまとまりで区切り、概念のラベルづけを行った。ついで、ラベルづけされた概念を整理し、重要でないものや同じ意味のものが他にある部分を削除したり、同じ意味の言い換えをひとまとめにした。この概念は、会話データから導かれるものであり、以降の分析で生成するカテゴリーの構成要素となる (原田, 2003)。なお、挨拶や世間話など、分析に必要ないと判断された発話は、この時点で分析から除外した。

つぎに、上記で得られた概念のうち、共通するものを整理してカテゴリーへと統合した。さらに、導かれたカテゴリーを整理し、多面的階層モデル由来のカテゴリーと社会的自己知覚に関連して生成されたカテゴリーに分類し、いくつかの内容領域を構成した。なお、分析から得られた概念やカテゴリーは、複数の分析者による意見の合意が得られるまで検討を繰り返した。

#### 4. 研究成果

中途脊髄損傷者3事例を対象に、自己概念に関する多面的階層モデルに準拠して、質的アプローチから自己変容過程を継続的に検討した。受傷に伴う変化および運動・スポーツに伴う自己変化について得られたカテゴリーを表1および表2にまとめた。これらを一連のプロセスとしてまとめたものが図3である。中途脊髄損傷者は、受傷により身体機能や身体部位の喪失を経験し、それまで存在してきた身体的側面 (身体能力、体型、筋力など) に関する知覚の喪失や価値あるものの喪失を経験し、自己が揺らいでいた。一方、運動・スポーツを通して、失われた身体的側面に関する知覚が再定義されることで価値の転換が生じ、受傷による喪失感からの脱却や生きる意味の再定義がなされていた。

また、この結果を踏まえ、関連論文の精査を行い、当事者からの視点のみならず、障害者スポーツ指導員や当事者の家族といった

表1. 受傷に伴う自己の変化

カテゴリー	概念
<b>&lt;身体的自己知覚の変化&gt;</b>	
身体能力の変化	歩行の制限 走行の制限 足を使う動作の制限 排尿・排便能力の制限 性的能力の制限 スピーディな動きでの時間調節不可 バランス能力の欠如
体調の変化	健康への意識
体型の変化	筋肉の一部欠損 受傷前の体型の喪失 体型の歪み
筋力の変化	受傷前の筋力の喪失 身体能力を補うための筋力の必要性
<b>&lt;社会的自己知覚の変化&gt;</b>	
日常生活の中心の変化	仕事中心の生活を喪失 仕事への自信喪失 仕事を非重視 交友関係中心の生活を喪失 交友関係の制限
周囲との関係性における意識の変化	人に迷惑をかけたくない 距離を置かれることへの不安 受傷前の日常への渴望
今後の生活	結婚への憂慮 今後の生活への不安
行動範囲の変化	行動範囲の制限
<b>&lt;自己の変化&gt;</b>	
自己の捉え方の変化	障害による制限への気づき 障害者という認識 自信喪失 健常者との比較 取り残された自分

表2. 運動・スポーツに伴う自己の変化

カテゴリー	概念
<b>&lt;身体的自己知覚の変化&gt;</b>	
身体能力の変化	新しい動作の獲得
(体調の変化)	変化なし
体型の変化	体型の向上
筋力の変化	筋力の向上 筋肉の発達
<b>&lt;社会的自己知覚の変化&gt;</b>	
情動的サポート	他者からの刺激 周囲からの評価
重要な他者	重要な他者との出会い 重要な他者からの容認
新たな生活の中心	競技中心の生活へ
交友関係の再構築	仲間意識 必要とされている自分
<b>&lt;自己の変化&gt;</b>	
新たな自己	自己の可能性への気づき 自己の可能性への挑戦 適当だった自分からの脱却
アスリートとしての自己	向上心 目標の設定 チームの一員としての自分
生活の充実	生活満足感
受傷前の自己の再現	謙虚な自分から受傷前の自分へ

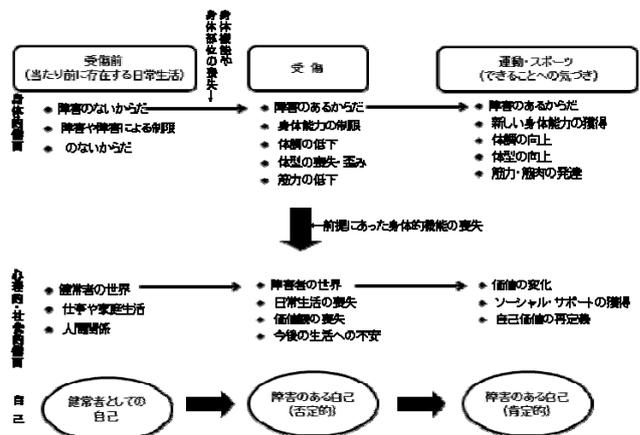


図3. 中途脊髄損傷に伴う喪失と再定義のプロセス

周囲の人々へのインタビュー調査を行い、そこから社会的要因について精査していく必要性があると考えられた。そこで、障害者スポーツ指導員や当事者の家族といった周囲の人々へのインタビュー調査を行うべく、インタビューガイドの作成など準備をすすめた。しかし、対象者とのスケジュールの調整がうまくいかなかった面もあり、すべてのインタビュー調査を終えることができなかった。

今後は、周囲の人々からナラティブなデータを継続して収集するとともに、脊髄損傷者にとどまらず、中途の視覚障害や切断などの障害のある方を対象に、自己変容過程を総合的に検討していくことが望まれる。さらに、これまでの研究成果を応用し、障害のあるトップアスリート（ハイパフォーマンス・スポーツ選手）を対象に、周囲の環境や人間関係などのダイナミックな関係性を踏まえた変容プロセスの因果モデルの構築へと発展させていく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 正野知基・橋本公雄・根上優・飯干明・長岡良治・西田順一・内田若希・角南良幸・柿山哲治・磯谷浩久・杉山佳生・山本教人, 大学初年次生の生活習慣の実態および健康状態, 体育・スポーツ教育研究, 査読有, 11 巻, 2011, pp. 28-38.
- ② 内田若希・永野典詞, 障害者スポーツ指導者に必要な資質に関する調査研究, 障害者スポーツ科学, 査読有, 7 巻, 2009, pp. 61-68.
- ③ 山崎将幸・杉山佳生・内田若希・織田憲嗣, バドミントン選手におけるモチベーションビデオの試合直前視聴介入効果, 測定評価, 査読有, 8 巻, 2009, pp. 17-25.
- ④ 内田若希・橋本公雄・山崎将幸・永尾雄一・藤原大樹, 自己概念の多面的階層モデルの検討と運動・スポーツによる自己変容—中途身体障害者を対象として—, スポーツ心理学研究, 査読有, 35 巻, 2008, pp. 1-16.

〔学会発表〕（計7件）

- ① 正野知基・橋本公雄・根上優・飯干明・長岡良治・西田順一・内田若希・角南良幸・柿山哲治・磯貝浩久・杉山佳生・山本教人, 大学初年次生の生活習慣の実態および健康状態, 平成 22 年度春期九州地区大学体育連合教育研究会議, 熊本市, 2011. 3. 13-14
- ② 内田若希, 自主シンポジウム「そうだったのか! メンタルトレーニング—勝利へのワンステップ」世界と戦うための

Next Step〜心理サポートを知ろう. 医療体育研究会/日本アダプテッド体育・スポーツ学会第 12 回合同大会; 富山市, 2010. 12. 4-5.

- ③ 内田若希・橋本公雄, 障害者スポーツ実習における社会的スキルの変化—ソーシャル・サポートの互恵性に注目して—, 日本体育学会第 61 回大会; 豊田市, 2010. 9. 8-10.
- ④ 内田若希, ラウンドテーブルディスカッション「行動科学にもとづく大学体育授業研究」障害者スポーツ実習における社会的スキルの向上を目指して. 第 59 回九州体育・スポーツ学会; 鹿児島市, 2010. 8. 28-29.
- ⑤ 内田若希, シンポジウム I アダプテッドスポーツへの心理的サポート. 九州スポーツ心理学会第 22 回大会; 北九州市, 2009. 3. 7-8.
- ⑥ 内田若希・永野典詞, 障害者スポーツ指導者に必要な資質に関する調査研究—指導者協議会九州ブロック研修・研究会の取り組みの報告#2—, 九州スポーツ心理学会第 22 回大会; 北九州市, 2009. 3. 7-8.
- ⑦ 内田若希・永尾雄一, 障害者競技選手へのチームビルディングを意図した心理サポートの効果. 医療体育研究会/日本アダプテッド体育・スポーツ学会第 11 回合同大会; 東京都, 2009. 11. 7-8.
- ⑧ Wakaki Uchida, Takako Hiraki, Kimio Hashimoto, Mikio Tokunaga, & Masayuki Yamazaki: A Study on the Effect of Psychological Skill Training in Enhancing the Psychological Competitive Ability of a Wheelchair Athlete. The 10<sup>th</sup> International Symposium of the Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise; Seoul, 2008. 8.8-10.

〔図書〕（計5件）

- ① 荒木雅信・内田若希, 大修館書店, これから学ぶスポーツ心理学, 2011, pp. 152-157.
- ② 内田若希, 日本障害者スポーツ指導者協議会福岡支部, 障がい者のスポーツ支援・指導ガイドブック, 2009, pp1-88.
- ③ 内田若希, 大修館書店, コーチングに役立つ実力発揮のメンタルトレーニング, 2009, pp.285-304.
- ④ 内田若希, 大修館書店, スポーツ心理学事典, 2008, pp. 498-499.
- ⑤ 内田若希・中原和美, 文光堂, 実践MOOK 理学療法プラクティス 運動機能の回復 促通テクニック, 2008, pp. 74-78.

#### 6. 研究組織 (1)研究代表者

内田 若希 (WAKAKI UCHIDA)  
北九州市立大学・基盤教育センター・准教授  
研究者番号：30458111